

## 浪漫を問う 奥田亡羊

・小野茂樹さんの倍も生きちゃってなんとせむ川はどうどうとな  
がれやまでも

短歌とは関係のない話から書き始めて恐縮である。「半沢直樹」

というドラマが話題になつていていたので最終回を見た。役者の演技

には迫力があるのだが、ドラマの内容がひどい。とくに主役がた

びたび口にする「倍返し」という言葉には耳をうたがつた。思想  
や思索のかけらも感じられない。ところがそれが「倍返しセール」  
だとか、歳末商戦にまで使われている始末だ。こんな言葉を必要

とする現代人の心の荒廃を思う。

そんなことを考えていた矢先、晋樹隆彦の第四歌集『浸蝕』の  
若山牧水賞受賞の知らせを聞いて、わたしは何か救いのようなも

のを感じた。「浸蝕」は作者の故郷の九十九里浜が地球温暖化の  
海面上昇や、それに対して造成された防波堤によつて失われてゆ  
くことを指しての言葉であるが、それだけでなく編集者としてと

もに時代を切り拓いた歌人や文学者の死によつて失われてゆく文  
学、そして無頼という生き方そのものの「浸蝕」をも意味してい  
る。この歌集は「文学」をテーマとして正面からうたつた歌集な  
のである。そのテーマの古さが私の意識を鮮<sup>は</sup>くした。

・歌うとは歌とはなにか過ぎたりし歌びとの背を思えばはかな  
・浅瀬にてじやぶじやぶ水浴びするごとく賑わう歌壇の佳しと言  
わなめ

・震災を泡沫のごとく詠むやから生きて己をなぐさむるのみ

・歌の編集業も三十余年、若かりし歌人ともども老いて霽れるや  
文学を詠んだ歌をあげてみた。声高に叫ぶのではなく、いずれ  
も日常の中に浮かび来る感懷を等身大でうたつてゐる。寄せては  
返す波のように、受け入れつつ拒む、深い喪失感と生きることへ  
の愛惜の心がそのまま歌に表われているかのようだ。

ところで、高島裕『廃墟からの祈り』に「諦めの作法」という  
文章がある。

「今私は、過去に向かつても、未来に向かつても、はつきり  
とした『限り』をイメージすることができる。日々の暮らしを重  
ねるなかで、私が生きるといふことは、可能性ではなく、不可避  
性を経験することなのだと、気付かされたからだ。この、抜き差  
しならない『諦め』を強ひられることによつてしか、歌は生まれ  
ない。そこにしか、歌の根拠はない。」

浪漫の本質を言い当てた見事な文章だ。ただ一点、高島がな  
ぜ「不可避性」という言葉を選んだのか、この本を読んでから三  
年、わたしはそのことを考えてきた。それに対する答えが晋樹隆  
彦の『浸蝕』にあつたようだ。晋樹隆彦の歌にも諦めと豊饒  
のイロニーがある。しかし、そこに「不可避性」はない。現実世  
界の浸蝕と〈われ〉の浸蝕が重なり、揺れ動く世界に身を委ねる  
自在な一体感がある。そこに私は上質なロマンチズムを感じた  
のだ。いま厳しい社会状況を反映して二十代の歌人の間にある種  
のロマンチズムが浸透しつつあるように見える。ロマンチズ  
ムは動きと瑞々しさがすべてだ。美意識としてあるいは態度とし  
て固定化された浪漫はすでに死んでいる。